

リベリア礼讃

—セアラ・ヘイルのアフリカ植民思想にみる男性性の危機・回復・依存—

増 田 久美子

はじめに

1854年4月14日付のアボリショニズム新聞『フレデリック・ダグラス・ペーパー』には、セアラ・ヘイル (Sarah Josepha Hale, 1788-1879) が執筆した二冊の家庭料理本についての書評が掲載されている。評者は彼女のレシピを「金銭と時間の度外れな無駄遣い」だと酷評したのち、次のような所感を述べる。「セアラ・ジョセファ・ヘイル夫人は、家事研究の片手間に、国家の一家父長制度である奴隷制について薄弱浅慮な擁護本を書くゆとりがあったようだ」¹。

じつは、この書評が真に批判したのは家庭料理本ではなく、ヘイルが1850年代に出版した『ノースウッド』(Northwood; or, Life North and South, 1852) と『リベリア』(Liberia; or, Mr. Peyton's Experiments, 1853) という二冊の小説のほうであった (Ryan 563)。ヘイルは19世紀の人気女性雑誌『ゴードィーズ・レディーズ・ブック』の著名な編集者で、啓蒙的な理念とヴィクトリアニズム的な道徳観念を基盤とした女性の家庭性 (domesticity) を唱導する論者だった。彼女の説く「女性の領域」は保守色が濃く、長らくヘイルは女性を政治領域から退けさせた反フェミニストと考えられてきた。しかし現在、彼女は「女性の領域」を閉域ではなく外部へ拡張しうる空間と捉え、アメリカ社会における公私空間の境界線を再構築し、女性が参加しうる公的空間を開拓しようと試みた人物として再評価されている。つまり、「男女の領域分離主義」に立脚したヘイルの家庭性とは、政治や社会における「女性の感化力」と女性の公的活動の場を拡大しようとする戦略だったのである²。

当時、ヘイルは奴隷制の即時撤廃をめざす急進

的なアボリショニズムを否定し、奴隷制問題の現実的な解決策として、自由黒人や解放奴隷を西アフリカのリベリアへ「帰還」させるリベリア植民運動を支持していた。穏健な反奴隷制の立場を表明する二冊の小説のうち、ことに『リベリア』は多くのアボリショニストが反対したアフリカ植民地化構想を具体的に描写し、その利点を喧伝するテキストであった。当然のように、『リベリア』は植民反対派から批判されるか、もしくは意図的に無視された——彼らにとって植民運動による漸進的な奴隷解放など、まさに「金銭と時間の度外れな無駄遣い」であった——が、むしろその意図された沈黙は、『リベリア』の読者が北部社会のみならず南部社会にも少なからず存在していたことを如実に物語る³。その後、この作品は文学研究史においてすっかり忘れ去られてしまうものの⁴、1990年代以降、スーザン・ライアンやエイミー・カプランらのヘイル再読によって注目されるようになる。ライアンは、アメリカ黒人をアフリカに入植させようとするヘイルの植民地主義思想について、北米植民地入植からアメリカ建国までの歴史をアフリカで再演しようとする白人ナショナリズムと捉えた。また、カプランはアメリカ黒人のアフリカ入植によって進展するアメリカの帝国主義的な膨張の根底に、家庭性の思想を読み解いている⁵。畢竟するに、1850年代におけるヘイルの家庭性とは、リベリア植民事業を通して自由黒人と解放奴隷をアフリカへ送り戻し、アメリカを完全なる白人キリスト教国家とするため、「女性の感化力」や女性の価値観を動員しようとする思想であったといえよう。では、ヘイルはアンテベラム期のリベリア植民運動と白人女性たちとの現実的な関係性については、どのように捉えていたのだろうか。

意外にも、小説『リベリア』に植民運動へ関与する白人女性は描かれていない。むしろ、テキストは白人男性と黒人男性の男性性 (manhood) を提示するジェンダー言説にあふれている。ヘイルはつねに「女性の領域」の拡大に尽力し、それが小説を執筆する動機でもあった。ならば、なぜテキストは女性の活躍に焦点を合わせず、男性の男らしさの形成や回復の問題に終始するのであるのか。

たしかに、リベリア植民運動とは、黒人たちに「自立」と新国家を与えることによって、彼らを一個の「人間／男性」(a man) に成す福音主義的な運動として、19世紀的な「慈善」(benevolence) に満ちた社会改良の場であり、同時に、白人男性にとっては自己の寛容なる「男らしさ」を誇示する機会でもあった (Dorsey, *Reforming* 144)。ヘイルのテキストは、植民運動の推進という喧伝のために、そのようなふたつの男性性のあり方を忠実に提示しているのかもしれない。だがここではまず、植民運動を通じて完成されていく白人男性の男性性が、小説『リベリア』では喪失の危機から始まる設定のあり方に注目する。これを検証することは、テキストにおける白人女性不在の意味と、横溢する白人および黒人の男性性の意味——いうなれば、ヘイルの植民主義的なジェンダー思想——を解き明かす手がかりとなるだろう。したがって、本稿はテキスト冒頭から表明される男性性の危機に着眼し、続いて白人および黒人登場人物がそれぞれの男性性を追求する過程で、人種的な対照性が露呈されていく構造の分析を試みる。そのような手続きをへて、その構造がじつは不可視の女性たちへの依存によって成立していたことを、アンテベラム期の植民運動におけるジェンダー問題のひとつとして提起してみたい。

1. ペイトン氏の「男らしさ」の危機——福音主義的男性性とリベリア植民運動

保守的な北部連邦主義者であったセアラ・ヘイルにとって、アボリショニズムが掲げる奴隷の即

時無条件解放とは、南部の白人奴隷主を完全否定している点で極論であり、国家の分裂を引き起こしかねない暴論でもあった。それは彼女が小説『ノースウッド』の序論で、「いま『アボリショニズム』として知られているものこそ、北部と南部の調和をひどく掻き乱しはじめたのです」(Hale, *Northwood* iv) と懸念していることから理解できよう。アボリショニズムに代わりうる穏便で漸進的な奴隷解放の方法を読者に提供するため、ヘイルはリベリア植民運動と男性性の関係を語るジェンダー化された言説を流用する。『リベリア』のプロットは、白人主人公の博愛精神の庇護のもと、白人社会アメリカで人間性／男性性 (manhood) を否定されてきた黒人たちが、自由と国家を獲得することによって「ひとりの男」(“a man”) となる成功物語として構成されている。「ひとりの男」になるとは、実在の黒人入植者の書簡に記されているように、植民事業の「成功」によって得られる黒人男性の「真の男性性」(true manhood) を有することであった⁶。

『リベリア』は19世紀初頭のヴァージニア州シダーヒルの大農園主、ペイトン家がふたつの危機に瀕する場面から始まる。ひとつは名門ペイトン一族の白人男性性の危機であり、もうひとつは黒人奴隷反乱の危機である。植民地時代より大土地所有者であった代々の当主は、「その高貴な主人たちの歓待、寛容、真なる慈善」(6) によって知られてきた。だが、家長である父ペイトン氏が急逝すると、家督を継ぐはずの長男や娘婿も次々と死去し、残された白人男性は末息子のチャールズのみとなってしまう。彼は家長として、母親や妻のヴァージニア、未亡人になり実家に戻った姉マーガレットとその子どもたち、そして数十名の黒人奴隷たちを扶養し、統率していかなければならない。ところが、その唯一の嫡男チャールズもまた病床に伏している (6-7)。

家長断絶の危機に直面したペイトン家に、奴隷反乱が起きるとの噂がもたらされる⁷。いつ襲撃されるかも知れぬ事態に、ペイトン家の黒人たちはマーガレットの指示のもとで武器を携え屋敷を守

ろうとする(18-19)。農園監督に雇われていた白人男性はペイトン家の早馬を盗んで逃走してしまうが、その臆病な態度と対置されるのが、女性や子どもの勇敢な行動と黒人奴隷たちの主人への「忠誠」(“fidelity”) (22)である。つねに家族から「判断力」(9)を信頼されているマーガレットは、幼い息子とともに毅然とふるまう(36-37)。また黒人たちについては、「おのれの忠誠を証明したがない奴隷など、この農園にはひとりもない」(21-22)と述べられているように、黒人男性のネイサンは「死ぬまで」マーガレットに従う(19)と断言し、チャールズにもっとも忠実な黒人女性ケザイアは、脱出の場面で「わが子のために闘う雌獅子」(37)さながらに先導的な役割を果たす。こうした危機のさなか、チャールズは家族への愛情を再確認し、奴隷たちの「忠誠」に報いるため、彼らを解放しようと決意する(33-35)。

やがて反乱の危機が去って自身の健康も回復すると、主人公は奴隷を解放し、彼らを「自由で自立した男」(53)にするため、一連の実験を開始する。その動機となる奴隷たちの「忠誠」は、ヘイルの植民地主義を实践する契機ではあるものの、危機に瀕して奴隷たちが「忠誠」を表明せざるを得なかったそもそもの原因とは、ペイトン家における家父長制の機能不全であった。それは「自立者」たる白人男性(主人)が、擁護すべき「従属者」たち(白人女性、黒人奴隷、子ども)に依存しているという、ジェンダー的にも人種的にも転倒した構造にほかならない。しかもチャールズは、自身の男性性が「従属者」に奪われる恐れがあることを自覚している。ペイトン家の防衛に無力であった彼は、姉や妻に向かって「僕がここで不甲斐なく横たわってなんていなければ、君たちはみな震えて泣き叫び、僕にしがみついていたろうに」(22)と皮肉まじりに語っている。しかし実際に女性や奴隷に「しがみついて」いたのは、主人のほうであった。

このように主人公のジェンダー的な危機から物語が始まる『リベリア』とは、黒人男性に男性性が付与されるだけの物語というよりも、むしろ、

アンテベラム期における白人男性の社会的・文化的男性性の所在を問いたずテクストとして読むことができる。19世紀の「真の男性性」をめぐる議論については、E・アンソニー・ロタンドの「独立自尊の男性性」(self-made manhood)以降、多くの研究者によって多様な男性性が検証されてきたが⁸、主人公チャールズを同定する男性性は、彼がリベリア植民運動に関与するという点で、福音主義的なプロテスタンティズムに立脚するものと考えられる。というのは、ヘイル自身が「序文」のなかでリベリア植民を「慈愛という純粋な動機」(iv)から萌芽したものと語っているように、植民運動を含むさまざまな社会改良や慈善活動に従事した男性たちには、「慈愛」ないし博愛精神を中心的特徴とする男らしさ、すなわち、「福音主義的男性性」(evangelical manhood)が認められるのである。

福音主義的男性性とは何か。クライド・グリフェンによれば、それはアンテベラム期の白人男性が社会改良に従事する「大義」を、「正義への揺るぎなき自信」として示す男性規範である。これは、たんなる自己の博愛精神の表明だけでなく、賛同者たちを組織化する統率力や、自己の価値観の有益性を世に知らしめる説得力をも意味した。また、このような福音主義的文化においては、彼らの男性性は都市労働者の男性にみられる「野卑」ないし「粗暴」——たとえば、過度な飲酒など——との対比によっても表現された(Griffen 188)。

歴史的にみれば、この種の男性性は元来「感情の発露、謙遜、神への服従」を特徴とした(Traister 155)。アメリカでは18世紀前半の「大覚醒」時代にその端緒があり、回心や救済を求める際の「感情的で直感的な」(Greven 90)精神のあり方を重視する男性規範であったため、革命時代の「合理主義、自制、中庸」を特徴とする啓蒙主義的な男性性とは区別された(Lindman 62-63; Traister 155)。また、「神と自己との主従関係」を強調した福音主義の白人男性たちは、実生活ではそれを「自己と妻との主従関係」へと横滑りさせることによって、家長という主体、すなわち「自立者」とし

て他の「従属者」を扶養した (Greven 128; Traister 155)。福音主義者にとって、従属者が主^{サブジェクト}体として浮上するという転倒した関係は「自立」を裏付け、そしてアンテベラム期においても、それは男性性の指標であり続けたのである⁹。

『リベリア』のペイトン家が所在する南部社会では、植民地時代より「名誉」および「支配力」という男性的資質が重要視されていた (Friend and Glover x-xi)。それらを誇示するために「自己主張」や「攻撃性」がさまざまな場面で競われたが、そのような白人男性の気風のなかで、パプティスト派の牧師たちは暴力の否定によって自己の「名誉」を示し、独自の男性性を規定した (Najor 43; Lindman 158)。さらに彼らは、とりわけ労働者たちの理性なき男性たちにみられた「粗暴」に抗して「自制」を強調するようになり、これに啓蒙的なジェントリ階級の男性たちが共鳴する。合理性や自制を「気高いふるまい」 (Najor 44) とみなしていたジェントリたちを取り込むことによって、南部における福音主義的男性性の概念が発展していったことを鑑みると、ペイトン家の「高貴な」当主たちにみられる「歓待、寛容、真の慈善」の精神 (6) は、このような福音主義的文化の背景から現れた「男らしさ」の特徴といえるだろう。

しかし社会全体からみれば、福音主義的男性性はけっしてアメリカ社会・文化の中心的規範ではなく、革命時代に理想とされた啓蒙主義的男性性ととも、19世紀前半には周縁的な価値観となった。というのは、社会が自由土地所有による独立自営経済から資本主義的な市場経済へと移行し、「自立」の意味が変化したからである。とくに都市部では、多くの男性が農業から離れて賃金労働に従事し、「雇われ者」という男らしからぬ境遇を正当化するため、市場経済に即した新しい男性性が模索された。たとえば、ニューイングランド地方の若者が、「大望」 (ambitions) という男性的自己理想を抱いて農村を去り都市へと向かったように (Opal x-xi)、都市における「自立」は、私有地での自営ではなく、職場での生産性と報酬額

で評価されるようになった (Griffen 186; Luskey 50)。

男性性の中心が市場社会に比重を移す一方で、別なる要因も福音主義的男性性を脅かしていた。福音主義のプロテスタンティズム自体が、女性性に結びついていったのである。「大覚醒」以降、1820年代まで続く一連の信仰復興運動のなかで、福音主義の主たる信仰回心者は女性であった (Cott 132)。福音主義は平信徒の宗教体験を認め、世俗の宗教権威や教会ヒエラルキーに抵抗し、ジェンダー・階級・人種に不問な平等主義を掲げた。ゆえに、福音主義の信仰運動は、社会における女性の主体的な行動を可能とした。社会全体を改良(もしくは改革) するべく、「慈善」の名のもとに宗教的使命感や道徳的責任感を負った女性たちは、伝統的なジェンダー規範を逸脱することなく公的活動に取り組んだ。男性主導の教会や慈善団体を活動母体とした場合でも、女性のネットワークが生まれていったのである (Cott 140-141; Ginzberg 15; Walters 106-107)。

こうして『リベリア』が執筆される1850年代までには、「男らしさ」は職能や経済的成功で評価されるようになり、社会改良や慈善活動の領域——福音主義的男性たちの「本領」——は女性に侵食されていった。福音主義的男性たちは、自身の社会的権威の後退と福音主義的プロテスタンティズムの「女性化」に対し、批判・肯定・黙認・危惧と多種多様な反応を示した。(Dorsey, *Reforming* 12; Douglass 141-142; Griffen 188)。ところが、以上のような動向にもかかわらず、福音主義的な社会改良を「男性の流儀」 (Dorsey, *Reforming* 20) と解釈し、男性たちが社会改良運動を主導した例もあった。歴史家ブルース・ドーシーによれば、その顕著な例とは、まさにヘイルの小説で唱導されるリベリア植民運動であった。

リベリア植民運動は、アンテベラム期の社会改良運動のなかで白人女性の関与がきわめて稀薄な運動として知られている。女性たちの慈善活動は、たとえばアメリカ聖書協会 (American Bible Society) のように、局地的な活動や団体に女性が

集い、それを発展させて国家規模の組織となる事例が多いが、リベリア植民運動は当初から国家中心のかつ男性的な事業として構想された (Dorsey, *Reforming* 142)。1816年にアメリカ植民協会 (American Colonial Society) が設立された際には、聖職者のほか多数の連邦議員や政治家が協会員として名を連ねており、また、慢性的な財政難に苦慮する協会は連邦政府の全面的な支援を必要とし続けた。非公式だった両者の関係は、じつは非常に密接だったのである (Staudenraus 26-30, 48-58)。

しかも、植民協会は地方支部の活動に支えられていたにもかかわらず、支部の発展に力点を置くことはなかった。協会は、白人女性が植民運動で活躍できる機会をほとんど提供しなかったが、白人男性には植民運動へ関与することこそ、真に男性的な行為であると喧伝した。たとえば、牧師たちはアメリカ独立記念日という祖国愛を鼓舞する機会に植民推進の説教と寄付募集を行ったが、それは政治と愛国心と宗教権威が絡み合う「主として男性的な領域」を創出し、白人男性に「男らしさ」を問いかける場であった (Dorsey, *Reforming* 144)。植民運動とは、黒人に人間性／男性性を獲得させ「ひとりの男」になることを奨励しながら、白人男性に自身の福音主義的男性性——グリフェンのいう博愛主義的な「正義」や、ドーシーが定義する「人格、同情心、有能さ、男らしき信心」 (Dorsey, *Reforming* 144) ——を立証する機会までも同時に提供したのである。

だとすれば、『リベリア』の主人公に降りかかる男性性の危機とは、市場原理的な男性性の主流化と福音主義的なプロテスタンティズムの女性化によって、権威を喪失しつつあった福音主義的な男性たちの危機を示唆している。この危機とは、リベリア植民の推進という「男性の流儀」で成し遂げられる運動を通じて、自分自身の男性性を取り戻すための必要条件なのだ。主人公チャールズが奴隷解放の計画を姉に打ち明けるとき、彼の姿は自信に満ちており(「僕はこの計画で成功することに、大きな期待を寄せています」) (48)、以後、

語り手は主人公をもはや「チャールズ」とは呼ばず、ひとりの成人男性として「ペイトン氏」と敬称するようになる (49)。このような呼称の劇的な変化は、福音主義的行為への帰依が男性性回復の手段となることの如実な例証となる。黒人に解放と自立を授けることで、ペイトン氏は転倒していた主従関係を正常化させ、代々のペイトン家の当主が有した「歓待、寛容、真の慈善」という福音主義的な男性性を取り戻していくのである。

2. ペイトン氏の「実験」にみる男性性のゆくえ

解放奴隷たちを自立させる「実験」は、ヴァージニアでの集団的農業からフィラデルフィアでの都市生活、カナダ移住を経て、最終的にリベリア入植へ続く。ペイトン氏はこれらの「実験」から、「奴隷たちが自分たちの善良な行為によって、自由とリスペクタビリティに到達したいと考えるかもしれない」 (49) と希望を抱く。ペイトン氏のような反奴隷制を主張する白人男性にとって、黒人が「自由」と「リスペクタビリティ」を獲得しえるかは、黒人が白人中流階級の価値観に即した「真の男性性」を獲得しえるかの指標だった。のちにハリエット・ビーチャー・ストウは、黒人男性作家フランク・ウェップの小説『ゲーリー家と友人たち』(1857)の序文にて、「いま奴隷として組上に載せられている人種は、自由、自治、向上の可能性があるのでしょいか」 (Stowe ix) と問いかけるが、彼女もまた黒人の人間性／男性性を「自由、自治、向上」といった白人中流階級の価値観で捉えようとした人物である。ストウやヘイルのテキストにおいて期待される黒人男性の人間性／男性性とは、中流階級の白人男性的な「男らしさ」を複製したジェンダー・アイデンティティなのだ。

では、奴隷たちの人間性／男性性は可能なのか。ヘイルは『リベリア』の作者として、黒人男性の男性性はアフリカの地で実現可能であり、アメリカ社会にいる限り彼らの男性性は成立しないと主張する。彼女は語り手ではなく、黒人自身に「ニガーはニガーでしかない」 (67) との発言を繰り返させることで、アメリカにおける自由黒人の社会

的疎外や、黒人自身の国家の必要性を力説していく。そして、黒人男性の男性性がさまざまな障害によって阻まれる状況とは対照的に、ペイトン氏は福音主義者として確実に自身の男性性を体得していくのである。

最初に行われた実験は、選出した黒人の男女に農地を分け与え、自主的な耕作労働を通して「自己信頼」(“self-reliance”) (56) を学ばせる試みだった。ネイサン、ケザイア、ポリドアの三名は相互扶助の精神を身につけながら見事な成果を上げるが、それ以外の黒人たちは「自墮落な生活」(58) に耽り、困窮の果てに「こそ泥や物乞い歩き」(69) をする始末であった。ペイトン氏は、南部社会で黒人を自立した農民に育てることは不可能と結論する。彼は実験の失敗を黒人たちの「生来の欠点」(69) に帰することはなかったが、黒人たちへの援助を控えると彼らが「浪費癖と不誠実によって近隣の厄介者」(59) になってしまうことを知る。ペイトン氏は「怠惰で役立たずの人間」を共同体に送り込んでしまったと自責し、そこでなされた「こそ泥や物乞い歩き」のような「悪事を取り除こうと真剣に努めた」(69)。こうして南部での農業実験は、ペイトン氏の使命感や人道精神を発露させただけで終了する。テキストは主人に依存する解放奴隷たちの従属性と、ペイトン氏の慈善に満ちた男性性を浮き彫りにさせたのである。

次の実験はフィラデルフィアでの都市生活である。ペイトン氏は噂に聞く北部社会の人種差別(48) や、黒人たちに悪影響を及ぼしかねない都会の「誘惑」(72-73) を憂慮し、この実験に賛同しなかったが、黒人女性クララの強い希望とこれまでの真摯な奉公に免じて、クララとベン夫妻とその娘、およびクララの弟アメリカスをフィラデルフィアへ移住させることにする。ベンがフィラデルフィア随一の上流階級家庭の御者としての仕事を得ることにより、一家は「こぢんまりとした心地のよい」(80) 家庭を築きはじめ、アメリカスも召使いとして雇われながら講演活動をおこなっていた。彼らは自由黒人として、あたかも白人中

流階級のような都市生活を享受していたのだが、ついに「試練のとき」(96) を迎える。ベンがリウマチで倒れて職を失って飲酒に溺れ、一家は壮絶な窮乏状態に陥ってしまうのだ。

フィラデルフィアにおいては、ペイトン氏と黒人男性の対照的な男性性は南部での農業実験とは異なる手法で描き出されている。南部では、両者は——物理的にも、主従関係(自立と依存)の程度においても——身近な存在であり、それゆえに男性性の対照も明快である。しかしこの実験では、ペイトン氏はフィラデルフィアへの「年に一度の訪問」(96) をやめ、ベン一家も(元)主人への依存を断ち切って、白人中流階級の価値観とそれに即した生活様式を手に入れようと必死に努力する。つまり、物理的にも主従関係の程度においても両者は疎遠となる。このような状況において、両者の男性性はどのように表現されるのか。

不在であるペイトン氏の福音主義者としての男性性は、それとは対照的な都市労働者たちの理性を欠いた「粗暴」によって照射されている。アメリカスが白人暴徒に襲われる場面は、一見ペイトン氏の男性性とは無関係と思われるが、消防団どうしの小競り合いに巻き込まれるアメリカスの窮状から浮上するのは、「良心」や「理性」のない「激昂する群衆」(90) の姿である。その「狂暴で破壊的な動物のごとき、本能まかせの行動」(90) のために、彼は散々に殴られてしまい、語り手は労働者たちによって引き起こされる「暴力という無法行為」(93) について、人種の観点から以下のように分析する。

サクソン人はアフリカ人の怠惰で従順な性質とは異なり、強い情熱と飽くなき欲求をともなって、自らを行動へ駆り立てる力強い活力や決然たる意志を抱いている[……。これらの特質は、立派な目的に向けられたときにも、低俗な方向に揺き立てられるときにも絶大であるため、いったん籠が外れてしまえば、無謀な計画に突き進む力にもなってしまう(94)。

語り手は、白人の優れた特質（「強い情熱と飽くなき欲求」「力強い活力」「決然たる意志」）を、黒人との比較という常套的なレトリックで列挙するいっぽう、「箍が外れて」しまう労働者の場合には、「無謀な計画に突き進む力」にもなると議論する。つねにアングロサクソン至上主義を説いて憚らないヘイルの眼からでも、アンテベラム期の白人労働者とは、中流階級と比するときには徹底した批判対象となる群衆なのだ。彼らの「空っぽの頭脳と未発達な理性」(95) から生じる暴力を、理性ある黒人男性の災厄として描写することで、福音主義的な男らしさに帰依するペイトン氏の男性性は最高度に顕彰されていく。

他方で、ベンの男性性は無残に剥奪されていく。彼は生来「活力と大望にあふれた」(52) 快活な混血人であり、フィラデルフィアでは自立とリスペクタビリティの獲得のために懸命に働く。そして妻クララも針仕事をしながら、白人中流階級家庭のように自宅に品のよい調度品を揃え、自分自身も申し分なく装い、娘にピアノのレッスンを受けさせる(78-80)。だが、ペイトン氏の妻によれば、それはベンの賃金には見合わない生活態度であり、クララが白人中流階級の生活を物質的に模倣することは、「愚行と濫費」(80) として戒められる。しかしクララたちは生活態度を改めることなく、ベンは健康を害して職を失い、「救いようのない酒乱」(107) となって廃人と化す。エレイン・パーソンズが述べているように、当時の飲酒と男性性喪失の社会的関係性について、男性性の核心たる「自律性」(autonomy) や「意志力にもとづく自立」(volitional independence) が過度な飲酒で侵蝕される事態とは、男性性の完全なる喪失を意味した (Parsons 54-55)。こうしてベンが男性性を失うと、さらに壮絶な貧窮が一家を襲う。町の宣教師リンゼー氏らによって一家の悲惨な状況が発見されたときには、生まれたばかりの赤ん坊が餓死していたのである (106)。一家は教会や慈善団体から援助を受け、ベンが材木割りの仕事を得ることで生活を持ち直すものの、もはやベンは「大望」(109) を取り戻せず、信仰心も失って世を疎

む人間となってしまう。ベンたちの不幸について、サミュエル・オッターやセアラ・ロスは、彼のような黒人男性が「自立」や「大望」を追求すると「罰せられる」と解釈する (Otter 217; Roth 154)。しかし、ベンに男性性喪失および貧苦という罰が与えられたのは、彼が自立と大望を求めたからではない。ベンとクララの苦難の原因は、彼らが忠告を受けても「愚行と虚飾の一切」(97) を断念しなかったことにある。しかもテキスト自体は、黒人による「自立」「大望」「自由とリスペクタビリティ」(さらに、これらの価値観を包括する「男性性」) への追求を決して否定せず、ネイサンやケザイアの例にあるように、むしろ肯定している。ここでテキストが注意深く論そうとするのは、黒人たちはそれらの価値観ないし男性性の獲得を期待されているにもかかわらず、アメリカの白人社会では絶対に実現しえないという矛盾である。むしろ、その背後には、黒人はアメリカを去って自分自身の国家を求めなければならないという、ヘイルら白人植民派が目論む黒人との共生の拒絶がある。黒人男性が「ひとりの男」になるべく男性性を獲得できなければ、彼らが自身の新国家を建設することは期待できないが、しかし、彼らがアメリカ社会にてその男性性を早急に獲得し市民として滞留することになれば、ヘイルの切望する白人キリスト教国家としてのアメリカは成立しない。ゆえに、黒人男性はアメリカ社会で生きる限り男性性を否定され続けるか、あるいは男性性が実現しそうな瞬間に社会からの転落を強要されることになるだろう。この袋小路について、厭世家となったベンがリンゼー氏に語る場面がある。

俺はいまだって善良で立派なものさ (good and respectable)。月に20ドル稼いで、女房が御婦人みたいに着飾っていたときと、まったく同じようにな。で、それが何だっていうんだよ。[...] たったいま、俺たちの横を通り過ぎていったあの黒人の男をごらんよ [...], あいつは必死に金を貯めこんでいやがる。あいつには少なくとも二万ドルもの資産があるんだが、それが自分や子どもの何の

役に立つんだ? [...] [あいつらは] 黒人の輪の中に入ろうとしない、かといって白人はあいつらと付きあおうとはしない。[...] あいつのブリュッセル織の絨毯だのピアノだのが、いったい何の役に立つのか知りたいもんだね。あいつらは駄目になるまでやり続けるのかもな。俺と同じ、誰もが忌み嫌うニガーでしかないのにな。(110)

ベンは現在の慎ましい生活が、かつて相応の賃金を受け取り、「御婦人」のごとく妻が着飾っていた頃の生活と同様に、体裁がよい(「善良で立派な」)ことを理解している。彼は黒人が経済的富裕(自立)と階級の上昇志向(リスペクタビリティ)のために努力することの無益さを悟り、「二万ドルの資産」をもつ黒人男性一家の事例をあげる。彼らがどんなに富を蓄積してリスペクタビリティを物質的に体现しようとしても、それは彼らの孤立を高めるだけでしかない。彼らの白人中流階級的な生活実践が無意味であるのは、その一家が「俺と同じ」ように「誰もが忌み嫌うニガー」にすぎず、結局は「駄目になる」運命が決定づけられているからである。このような悲観を抱えながらも、ベンは節制と勤勉を守り続け、低賃金と重労働にもかかわらず「稼いだ金を妻に持ち帰った」(113)。驚いたことに、ベンは節制と勤勉の徳性、慎ましい生活に「善良で立派な」ことを見出す精神性、実際に賃金を家庭にもたらす経済的自立といった白人中流階級の価値観をすでに身につけていたのだ。だが、そこへ到達していても、彼がアメリカ社会の「ニガー」である限りは「真の男性性」を確立することはできず、テキストは黒人自らに「ニガーはニガーでしかない」と復唱させるのである。

第三の実験として、カナダへの定住が計画される。しかし、この計画は実際に黒人たちが送り込まれることなく頓挫してしまう。というのは、ペイトン夫妻がカナダの黒人コミュニティを訪問した際に、主人公は彼らに南部黒人と「同様の緩慢」や「労働の嫌悪」(122)を認め、解放奴隷たちをヴァージニアからカナダへ移動させたところで、何の利点もないと判断したからである。カナダの

黒人はペイトン氏に会うと、彼の男性性が「ゆったりとした威厳のある動き、堂々としつつも恵み深き気配」(123)に表れているのを感じ取る。両者がたがいの資質を認識しあうこの場面は、南部社会における主人と奴隷の主従関係を反芻しよう。

以上のように、南部での自営農業、フィラデルフィアでの都市生活、カナダへの定住は、黒人の男性性の確立という点では成果なく終わる。だが、主人公にとってこの実験は、彼がペイトン家の家長に受け継がれてきた福音主義的な男性性を取り戻すことができたという点で、成功したといえるだろう。ペイトン氏は黒人奴隷の解放と自立という慈善の行為を通して「男らしい信心」を明示し、そして黒人という他者に依存される自立する男性となりえたのだから。解放奴隷たちの現実的な自立は、ペイトン氏の男性性回復の代償に供せられてしまったのだ。

3. 「依存」の構造——福音主義者の男性と消された女性

黒人たちが自立やリスペクタビリティといった男性的資質を有しているにもかかわらず、アメリカ社会で人間／男性になることを拒絶される不合理は、小説の舞台がリベリアへ転ずると、一気に解消に向かう。ペイトン氏の奴隷のなかでは、ケザイア、ポリドア、そしてネイサンの息子ジュニアスが第一移民となってリベリアへ入植することになり(143)、彼らはアフリカ大陸のキリスト教化というペイトン氏ら植民推進派の大義を背負って、「雄々しく」(manfully)植民活動を遂行していく(161)。ペイトン氏はジュニアスからの手紙によって、「アフリカでは、アフリカ人は存分に成長することが許される——一個の人間となるのだ」(179)と確信する。ペイトン氏に後押しされたベンとクララもまたリベリアに入植すると、ベンはふたたび「大望」と「活力」を取り戻し(228)、精神的に自分の土地を開墾する。ペイトン氏はベンが「ひとりのリベリア人」(“a Liberian”)としての自負を抱きはじめたことを知り(228)、つ

いに長きに渡って取り組んできた奴隷解放と黒人の自立という問題について、その解決をみる。また、自分自身の福音主義者としての男性性については、アフリカでの布教活動に生涯を捧げる決意をしたジュニアスによって保証されることになる(143)。ジュニアスの活動は「ペイトン氏の寛容を通して」(231) 続行されることが告げられ、この信仰活動とともにジュニアスに内在化した心的な主従関係によって、ペイトン氏は自分自身の男性性をアフリカの地から保証され続けるのである。

こうしてベンやジュニアスたちは「リベリア人」となって植民活動に従事していくが、その新しい国民の呼称は、アメリカ黒人がアメリカの白人社会から隔絶したリベリアにおいて、はじめて「アメリカ人」として主体化したことを示す (Ryan 572; Kaplan 596)。彼らの話す英語や家庭生活の風景はアメリカのそれらを模倣し、とくにケザイアはリベリアの「アメリカ人」の役目をほかの誰よりも模範的に演じている。彼女はペイトン氏の奴隷のなかで、女性でありながらもっとも知的で男らしく(ネイサンによれば、「ケザイアはここらではいちばんいい男」である)(58)、アメリカ社会にいる限り黒人は「ニガーでしかない」ことを熟知しており、主人の植民計画にいちやく賛同した人物である。彼女はキリスト教信仰の先鋒として、柵囲いと庭のある家屋を建て、現地人の子どもたちを養子にし、キリスト教学校で現地人の女性や子どもたちに英語の読み書きと裁縫を教える(168, 208, 216-217)。このように、アフリカにおけるアメリカ的な「家庭性化／文明化」(domestication) (Kaplan 596) は、家庭や学校からアフリカをキリスト教化する植民者の使命として、きわめて女性的な価値観と結びついた行為を通して達成され、その行為者であるケザイアは、母親かつ女性教師となることによって自らの「女性性」を獲得するのである。

ケザイアのこのような母親的な教育活動を通じて浮上するのが、植民運動と白人女性たちの関係である。既述の通り、リベリア植民事業への白人女性の関与は稀薄であったといわれ、その根拠の

ひとつとして、彼女らの活動が子どもたちの教育や学校運営に限定されていたことがあげられている (Dorsey, “A Gendered History” 92-93)。しかし、ヘイルのような白人女性にしてみれば、限定的とみえる教育分野への関わりは、女性が「男女の領域分離主義」に抵触せずに、政治的圧力としての福音主義的な慈善活動を実現させる手段であった。では、なぜヘイルは教育活動に従事する白人女性すら登場しない物語を作り上げたのだろうか。

その理由のひとつは、女性による事実上の政治介入をテキストで正当化することができなかったからであろう。たとえば、1829年にヴァージニア州で設立された植民協会の女性支部 (Fredericksburg and Falmouth Female Auxiliary) の事例は、穏健な奴隷解放を支持した白人女性たち——南部の「女主人」として、自らが奴隷制の直接的当事者であった——の精力的な活動を示しているが、その活動は協会への献金ばかりでなく、著名政治家の妻たちの入会に奏功し、さらには「活気のない男性支部」の立て直しにも及んだ。つまり、彼女たちが家庭の領域を超えて、まさに男性の領域へと踏み込んでいたことは誰の眼にも明らかだった (Varon 46-47)¹⁰。おそらく、そのような既存の社会的認識から生ずる批判を回避するため、(政治的と臭わせる) 白人女性の存在を『リベリア』から完全に消し去る必要性があったのである。ゆえにテキストの語り手は、「現地人の子どもたちのためのキリスト教学校」が「不撓不屈のロット・ケアリー」によって「社会の主要な目的のひとつ」(168) として設立されたと述べるに留め¹¹、その設立を支えたはずの女性たちについては言及していない。さらに別の視点からも考えてみたい。意図的に描かないことを選んだ作者の行為とは、逆にその行為によって何かを掘り起こそうとする身振りであるとすれば、ヘイルはいったい何を明らかにしたかったのかという疑問を読者は抱かざるをえないのだ。そして、その「何か」とは、運動に関与した白人女性たちが、かつてはアメリカ植民協会という組織にとって不可欠

な存在であった事実にほかならない。

リベリア植民運動のような国家的規模の社会改良において、アメリカ植民協会が最重要と考えていたのは、協会の機関誌である『アフリカン・レポジトリー』誌が掲げるように、組織の「道徳的な正しさと慈善」を証明することにあつた¹²。そのため、男性指導者たちが運動の推進のために「道徳的で慈悲深い」白人女性らの賛助を募ることは必須であつた (Varon 43-44)。1830年代初期に植民協会がアポリシヨニストから激しい非難と攻撃を受けるようになると、指導者たちはリベリアの植民地化が「国家的な慈善活動」であることを強調し、協会活動の正当性を「道徳性と慈善」という白人女性たちの価値観にますます依存するようになった (Yonger 239)。事実、フィラデルフィアに設立された植民協会支部の女性団体 (Philadelphia's Ladies' Liberia School Association) の研究事例は、女性的な価値観をもって組織の結束を図ることが、外部からの攻撃のみならず協会内部のセクト的な分裂を防ぐとして、男性指導者たちから重要視されていたことを示している (Yonger 248)。

ところが、1847年のリベリア独立以降、植民協会は植民運動の中心拠点というよりも派遣エージェントとなり、さらに政府からの支援によって首都モンロヴィアに領事館が設立されると、白人女性たちの「道徳的で慈悲深い」尽力は不要な要素になってしまう。彼女たちは植民運動における役割を失い、協会の機関誌から女性の活動にかんする記事が消えていった (Yonger 257-258)。このような植民運動の歴史的背景に目を向けるならば、『リベリア』における白人女性の不在とは、「女性の領域」から逸脱することへの批判を回避しようとする作者の意図に加え、彼女たちの役割の消失をまさしくテキストからの消失として反映させているとも考えられるだろう。

たしかに、リベリア植民運動とは、指導的立場にあつた白人男性たちが自由黒人や解放奴隷、そして白人女性という人種的・ジェンダー的な他者を利用することによって植民地化を正當的に遂行

する政策であり、また、アメリカ国内で脆弱であつた福音主義的な白人男性の男性性を再生させる手段として機能した。しかし同時に、ヘイルのテキストからの（実際には活躍したであろう）白人女性の消失によって、むしろ否応なく呼び起こされるのは、福音主義者の男性たちが白人女性の道徳性や慈善に依存していた事実である。つまり、福音主義的な男性性の危機とは、社会改良の場における女性たちの主体的な活躍を見せ消しにする言説として機能しているのだ。危機に瀕していた男性性が、黒人男性との対比から上首尾に回復していく『リベリア』のテキストは、その構造において、作家自らが抹消した白人女性の活動に依存することから出発している。この見えざるものへ依存こそが、男性性回復の根源なのである。

おわりに

描かないことによって白人女性の存在を描き出すというヘイルの戦略は、『リベリア』出版時より20年前の時代であれば不要であつたにちがいない。『ゴードィーズ』誌に吸収合併される以前、ヘイルが編集していた雑誌『レディーズ・マガジン』の1833年6月号には、白人女性たちの「道徳的で慈悲深い」活動が率直に言及されている。

「アメリカ植民協会は、その成功の多くを女性の慈善と感化力に負っているのです。女性たちの援助がなければ、協会はほとんど持続することなどできなかったでしょう」と、シンシナティの雄弁な慈善家であるフィンリー氏は述べています。「男たちがほぼ絶望して」と、彼は続けてこう言っています。「計画をご破算にすると危ぶんだとき、姉妹であるヴァージニアの慈悲深き女性ふたりが、植民協会に12,000ドルの遺贈を申し出たのです。[...] アフリカの運命は、われわれ自身の国家と同様に、アメリカ人女性の感化力に大きく左右されるでしょう」[...]。

女性の領域は、善行という女性の力を行使するべく、キリスト教の愛智によって絶えず拡大しているのです。(Hale, "Woman's Sphere" 276)

興味深くも「女性の領域」と題された短い記事において、ヘイルは白人女性の存在を顕在化させない小説『リベリア』の作品戦略とは完全に逆の態度を見せる。彼女はあからさまにアメリカ植民協会における「女性の慈善と感化力」を称揚し、福音主義的な「善行」を通して、「女性の領域」が着実に拡大していることを意気揚々と語る。注目すべきは、植民協会が経済的に行き詰まり、絶望していた男性たちが計画を諦めようと危惧していたときに、「ヴァージニアの慈悲深き女性ふたり」が現れて「12,000ドルの遺贈を申し出た」という挿話である。女性たちはまさに植民運動という政治活動において、もっとも主体的な行為者であったのだ。「雄弁な慈善家」である男性が宣言しているように、植民協会と男性指導者たちは精神的にも経済的にも、まさしく「女性の慈善と感化力に負って」いたのである。

『リベリア』という小説は、植民運動における黒人の男性性の形成を呼びかけつつ、その内実は白人男性の福音主義的男性性の回復と再生を目論んだものであった。だが、われわれが植民運動にかかわった白人女性たちの過去を知るとき、そのような「男らしさ」の再生が女性たちへの依存のうえに達成されていたことをも解き明かす。『リベリア』とは、女性の公的活動の場の拡大を何よりも渴望する女性作家が、不可視の女性たちの政治性を現前させる物語だといえるだろう。

註

¹ Literary Notice," *Frederick Douglass' Paper*, April 14, 1854: 3, quoted in Ryan (563).

² 家庭性を政治性に接合するヘイルのドメスティック・イデオロギーを、女性の公的世界への参入として解釈する議論については、ニーナ・ベウムやパトリア・オッカーを参照されたい。

³ ライアンは『フレデリック・ダグラス・ペーパー』以外の主要な反奴隷制新聞として、『リベレーター』やアメリカ反奴隷制協会の週刊新聞 (*The National Anti-Slavery Standard*) にも小説『リベリア』への直

接的な言及がないことを突き止めている (562-563)。反植民地主義の立場から『リベリア』を批判する書評については、以下を参照のこと。"Critical Notices: *Liberia; or, Mr. Peyton's Experiments*," *Southern Quarterly Review*, 9.18 (April 1854): 542.

⁴ 『リベリア』が文学研究の対象から消えた理由に、いわゆる「反アンクルトム小説」のカテゴリー化を指摘できる。ハリエット・ピーチャー・ストウの『アンクルトムの小屋』(1852)の出版後、ストウに反論する内容で登場した類似小説群は一律に「反アンクルトム小説」と括られ、文学的に無価値という評価を付された (Gossett 212)。「反アンクルトム小説」の視点から『リベリア』を奴隷制擁護の小説として分析する近年の論考については、セアラ・ロスやジョーダン・レイクラを参照のこと (Roth 148-149; Jordan-Lake 89-91, 138-139)。

⁵ 他の重要な『リベリア』論として、ポストコロニアル論の視座からアメリカによるリベリア支配への批判書としてテキストを解釈した竹谷悦子や、人種問題の解決の目的で案出される「国家」と宗教性のなかに、19世紀アメリカ文化の「世俗化」を論証したジョーダン・A・スタインがあげられる。さらにサミュエル・オッターは、おもにフィラデルフィアの自由黒人をめぐる人種問題に着目している。

⁶ リベリアで「成功」した黒人たちの手紙について、たとえば、ランドール・ミラーの編集した解放奴隷一家の書簡には、「[リベリアでは]わたしはひとりの人間 (a man)のごとく自分を語り、ひとりの男 (a man)であることを証明できます」(80)という表現が見られる。同様の表現は、『リベリア』巻末に付録された実在の黒人入植者からの書簡群にも散見される。ヘイルが周到に用意した20通ほどの書簡には、黒人はアメリカではなくリベリアで「人間/男性」になることが強調されている (Hale, *Liberia* 247-280)。

⁷ この反乱は1800年の「ガブリエルの陰謀」を言及していると推察されているが (Otter 217; Ryan 561)、ヘイルの創作過程に照らすと、ヴァージニアでアフリカ植民計画への関心が再燃するきっかけとなった1831年のナット・ターナーの反乱を指すとも考えられている (Stein 851)。

⁸ 18世紀から19世紀までの多様なアメリカ的男性性につ

いて、本稿はおもにトマス・フォースター、カーンズとグリフェン、クレイグ・T・フレンドとローリー・グロバーらの研究に依拠している。

⁹ ここで議論されている「自立」という男性的指標は、もちろん、福音主義的な男性性に限定されるわけではない。たとえば革命時代においては、白人男性の「自立」は女性や黒人男性との主従関係だけでなく、自己の労働力を売って賃金を得る「雇われ者」(hireling)の存在によっても規定された。「雇われ者」は自立せず従属的ゆえに市民としての徳性に欠ける、つまり男性的でないと見なされたのである (Roediger 44-47; Roney 159-161; Stanley 84-85)。本稿では、このように「市民性」と強固に結びついた共和国的な理想的男性像を「啓蒙主義的男性性」(Enlightened manhood)とし、福音主義的男性性とは区別する。

¹⁰ 自分たちの「女性の領域」を逸脱した行為について、女性たちはそれを「女性の礼節」を失うものではなく、「家庭の領域内で」なされた行為だと弁明しなければならなかった (Varon 46)。

¹¹ ヴァージニア出身の黒人牧師ロット・ケアリー (Lott Cary, 1780-1828) は傑出したリベリア入植者のひとりである。通常、アフリカ植民運動史においては、彼は農業や経済活動への貢献によって評価されており、キリスト教学校を設立したことについて言及されることはない (Burin 67; Staudenraus 96-97)。

¹² “Colonization Society,” *African Repository and Colonial Journal* 1 (May 1825): 68; Staudenraus, 118.

引用文献

- Burin, Eric. *Slavery and the Peculiar Solution: A History of the American Colonization Society*. Gainesville: UP of Florida, 2005.
- Carnes, Mark C. and Clyde Griffen, eds. *Meanings for Manhood: Construction of Masculinity in Victorian America*. Chicago: U of Chicago Press, 1990.
- Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood: “Woman’s Sphere” in New England, 1780-1835*, Second Edition. New Haven: Yale University Press, 1997 [1977].
- “Critical Notice: *Liberia; or, Mr. Peyton’s Experiments.*” *The Southern Quarterly Review*, 9. 18 (April 1854): 542.
- Dorsey, Bruce. “A Gendered History of African Colonization in the Antebellum United States.” *Journal of Social History*, 34. 1 (Fall 2000): 77-103.
- . *Reforming Men and Women: Gender in the Antebellum City*. Ithaca: Cornell UP, 2002.
- Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. Reprint. New York: The Noonday Press, 1998 [1977].
- Foster, Thomas A., ed. *New Men: Manliness in Early America*. New York: New York UP, 2011.
- Friend, Craig Thompson and Lorri Glover, eds. *Southern Manhood: Perspectives on Masculinity in the Old South*. Athens: U of Georgia Press, 2004.
- Ginzberg, Lori D. *Women and the Work of Benevolence: Morality, Politics, and Class in the Nineteenth-Century United States*. New Haven: Yale University Press, 1990.
- Gossett, Thomas F. *Uncle Tom’s Cabin and American Culture*. Dallas: Southern Methodist UP, 1985.
- Greven, Philip. *The Protestant Temperament: Patterns of Child-Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America*. Chicago: U of Chicago Press, 1977.
- Griffen, Clyde. “Reconstructing Masculinity from Evangelical Revival to the Waning of Progressivism: A Speculative Synthesis.” Mark C. Carnes and Clyde Griffen, eds. *Meanings for Manhood: Construction of Masculinity in Victorian America*. Chicago: U of Chicago Press, 1990:

- 183-204.
- Hale, Sarah Josepha. *Liberia; or, Mr. Peyton's Experiments*. Reprint. Upper Saddle River, New Jersey: The Gregg Press, 1968 [1853].
- *Northwood; or Life North and South: Showing the True Character of Both*. Reprint. New York, Johnson Reprint Corporation, 1970 [1852].
- “Woman's Sphere.” *Ladies Magazine* 6 (June 1833): 276.
- Joiner, Thekla Ellen. *Sin in the City: Chicago and Revivalism, 1880-1920*. Reprint. Columbia: U of Missouri Press, 2013.
- Jordan-Lake, Joy. *Whitewashing Uncle Tom's Cabin: Nineteenth-Century Women Novelists Respond to Stowe*. Nashville: Vanderbilt UP, 2005.
- Kaplan, Amy. “Manifest Domesticity.” *American Literature*, 70.3 (Sep 1998): 581-606.
- Kenny, Gale L. *Contentious Liberties: American Abolitionists in Post-Emancipation Jamaica, 1834-1866*. Reprint. Athens: U of Georgia Press, 2011.
- Lawes, Carolyn J. *Women and Reform in a New England Community, 1815-1860*. Lexington: UP of Kentucky, 2000.
- Lindman, Janet Moore. *Bodies of Belief: Baptist Community in Early America*. Philadelphia: U of Pennsylvania Press, 2008.
- Luskey, Brian P. *On the Make: Clerks and the Quest for Capital in Nineteenth-Century America*. New York: New York UP, 2010.
- Miller, Randall M., ed. *Dear Master: Letters of A Slave Family*. Athens: U of Georgia Press, 1990.
- Najor, Monica. *Evangelizing the South: A Social History of Church and State in Early America*. New York: Oxford UP, 2008.
- Opal, J. M. *Beyond the Farm: National Ambitions in Rural New England*. Philadelphia: U of Pennsylvania Press, 2008.
- Otter, Samuel. *Philadelphia Stories: America's Literature of Race and Freedom*. New York: Oxford UP, 2010.
- Parsons, Elaine Frantz. *Manhood Lost: Fallen Drunkards and Redeeming Women in the Nineteenth-Century United States*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2003.
- Roediger, David R. *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*. Revised Ed. London: Verso, 1999 [1991].
- Roney, Jessica Choppin. “Effective Men' and Early Voluntary Associations in Philadelphia, 1725-1775,” Thomas A. Foster, ed. *New Men: Manliness in Early America*. New York: New York UP, 2011: 155-192.
- Roth, Sarah N. *Gender and Race in Antebellum Popular Culture*. New York: Cambridge UP, 2014.
- Rotundo, E. Anthony. *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. New York: Basic Books, 1993.
- Stanley, Amy Dru. “Home Life and the Morality of the Market.” Melvyn Stokes and Stephen Conway, eds. *The Market Revolution in America: Social, Political, and Religious Expressions, 1800-1880*. Charlottesville: UP of Virginia, 1996.
- Staudenraus, P. J. *The African Colonization Movement, 1816-1865*. Reprint Ed. New York: Octagon Books, 1980 [1961].
- Stein, Jordan Alexander. “A Christian Nation

- Calls for Its Wandering Children': Life, Liberty, Liberia." *American Literary History*, 19. 4 (Winter 2007): 849-873.
- Stowe, Harriet Beecher. "Preface." Frank J. Webb, *The Garies and Their Friends*. Robert Reid-Pharr, ed. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1997.
- Taketani, Etsuko. *U. S. Women Writers and the Discourses of Colonialism, 1825-1861*. Knoxville: U of Tennessee Press, 2003.
- Ryan, Susan M. "Errand into Africa: Colonization and Nation Building in Sarah J. Hale's *Liberia*." *The New England Quarterly*, 68. 4 (December 1995): 558-583.
- Varon, Elizabeth R. *We Mean to Be Counted: White Women and Politics in Antebellum Virginia*. Chapel Hill: U of North Carolina Press, 1998.
- Walters, Ronald G. *American Reformers, 1815-1860*. Revised Ed. New York: Hill and Wang, 1997 [1978].
- Yonger, Karen Fisher. "Philadelphia's Ladies' Liberia School Association and the Rise and Decline of Northern Female Colonization Support." *Pennsylvania Magazine of History and Biography*, 84. 3 (July 2010): 235-261.